

いななき

8

'70



青山学院馬術部



目次

巻頭言	伊藤文雄	1
偶感	植松英二	2
雑感	青木真次	3
現況報告及び見通し	佐藤一貫	4
四十四年度主将あいさつ	芦川城次	8
四十五年度主将あいさつ	伊納保夫	9
会計だより	六平潔	12
随想	伊藤文雄	13
私の思い出	曾我正村	13
たばこ	梶洋之助	14
「原稿を書く前に」	小森谷正子	14
福島遠征	石割洋子	15
大学紛争の中で運動部の学生はどうしたらいいのか？	安田義正	16
“自己の慾望”	大境まり子	17
ある日	青木京子	18
我が友人 秘録	川島透	19
三匹の女ロメ	沈島	20
思い出すまゝに	沈島	22





青学馬術部の或る時期	伊藤芳富	23
合宿記	小林正樹	24
白井での合宿	薄井周子	24
合宿の思い出	斎藤真子	27
上級生と合宿記	上野かなこ	28
合宿の感想	青木京子	29
訪問記	内藤喜嗣	30
福原美里さんを尋ねて	秋元国松	30
誌上馬学	原文雄	31
二部・高等部記	白井豊	34
学友会馬術部の思い出	木村敏夫	34
二部馬術部活動報告	木村敏夫	35
高等部記	木村敏夫	36
現役幹部紹介	木村敏夫	37
座談会 (二年生による)	木村敏夫	38
試合記録	木村敏夫	41
馬匹紹介	木村敏夫	45
編集後記	里中郁男	47



巻 頭 言

部長 伊藤 文雄

一九七〇年は内政の年と云われる。それはSelf-Government の年とも云えるかもしれない。

一つの集団を考えてみる場合、その集団は単なる結合体ではなくて、有機的組織化された一つの生命をもった集団でなければならぬ。外見上それが如何に体裁よく組織化されていても、それに実体が伴わなければ中味のないフーセンにすぎない。

今年の内政の年と云われる。馬術部にあつてもそうかもしれない。部員一人一人のSelf-governmentsが大事である。また、部としてのそれができているかどうかと云う事でなく、それをしなくてはならない。軸が一つの生物の如く有機的組織体として充実した活動力をもつ部となりうれば、成績も良くなるだろう。

「いななき」がその役割を果してくれる様に、即ち、部の有機的組織体としてのコミュニケーションの一つの手がかりとなる様に祈るしだいである。



偶 感

緑鞆会幹事長 植 松 英 二（昭二十八年卒）

三月といえば、全てのものが活動する。まず、冬型の気象がアンバランスになって、風の吹く日が多くなる。気候もそうだが、人間にとつても、三月は移動期である。入学、卒業のときであり、就職の時期でもある。人々は、冬の重いオーバーをぬいで、軽快な服装にかわる。とくに東京では、三月にもなると色彩がはなやかで、明るくなるのが日立つてくる。それにつれて人の気持も、何かそわそわさせて、落ち着きがない。全てのものが、冬の重苦しい閉鎖から、とかれたという感じである。解放され、自由であるということとは、喜びであるにちがいない。しかし、それは手離しによいことかといえは、かならずしも、そうではあるまい。いわば、どこへ行つてしまふかもしれないという不安が、そこにあるのだ。

解放された、自由にされたということ、手離しに夢中となり、自分の恣意のままに、無謀な突進をしていると、思わぬ挫折にあつたり、風波にのみこまれてしまわぬとも限らない。三月は冒険の月である。冒険と無謀な突進とは違ふ。

わたしがおそれるのは、解放と自由とが、無謀な暴走となつて、新しい学校や、職業の中に、中心を失つて、自己をなくしてしまふことである。わたしたちの自由が、人間の根底に基礎づけられた自由であるなら、あらゆるわたしたちの冒険にあつて、その中心から離れるようなことはおこらず、自由になつてわたしたちは確実であり得るであらう。

雑 感

緑鞍会会長 青木真次

（昭四年卒）

私も年のせいか、この頃はのんびりした時間がほしいと思ったり、少しは落着いた生活が望ましいなどと、柄にもなく想うことがある。

そういつた夢想のたびに目に浮ぶのは、青い空、静かな山ぶところ、そこにはきまって落葉の上に放し飼いの馬が二、三頭、秋のやわらかい日ざしに、そのたてがみや、尻のあたりが銀色に映えているといった風景なのである。

週末ですら、つきあいゴルフなどでつぶれることが多いのだが、たまに、あてどなく訪れる浅間山麓や、富士山麓などの人気の余りない谷合いや、林の中の静かなひとときが、やたらにいいのである。そんなときにきまって馬が欲しいのであり、その目の前の絵の中に馬がいて欲しいのである。以前は、浅間や富士には、その馬のいる景色があつたのに、近年、それも自然の形としては、消え失せてしまつて淋しい。

私は仕事のことで欧州や米国に時々出かけているが、僅かな時

を盗むようにして、近くの田舎や山合いに入り込むことを楽しみにしているのも、馬のいる自然の風景について心ひかれるせいなのだろう。

短い滞在や、僅かな旅だけで比べ得べくもないが、自然の中で馬との生活をいとむといった風景は、欧州よりもアメリカの方に、より多く残っている様だ。馬の実用の時代が去つて、すべてメカニズムに制せられる今日では、馬はもはや歴史の中か、斜陽の儀式か、或いはスポーツや競馬としての「技術」の中だけに生残っている中で、「馬をいとむ」といった気風が、アメリカには未だ沢山残っている様だ。これはアメリカの機械文明への反発かと思つてみたが、どうやらそうではなくて、あのアメリカの、馬と共に斃れ、馬と共に拓いていつた、「GO WEST」の歴史が、ひいおじいさんや、おじいさんの時代の身近なものとして、今の人達の血の中に残されていること、そしてその残されたものはぐくんでいける環境と、広大な自然がアメリカにはある、と、いつことらしい。

話がたまたまアメリカの馬のことに移つてしまつたが、私は最近で知らぬがまさに、アメリカの馬術は余り品格のない、技術的にはラフなカウボーイの実用馬術だときめつけて、実はこれを馬鹿にしていたものたつた。ところが茲一、二年、私の「夢想」が満たされぬまま、せめてと思つて少しあさつた、むこうの文献

や、写真集をよくよくみつめてみて、それが私の大きな誤ちであったことを悟つたのである。ただ、この両者の発達の過程が異つているし、スタイルも同じではないが、両者の「馬術」としての終着点は全く一つのものであり、今日その極致ともいうべきものがテネシーやコロラドやカリフォルニアに沢山残存し続けているということである。

このことは決して、スパニッシュ・ライディング・スクールが花を咲かせつづけ、そして未だ健在の御大パデルスキー大佐の代表する欧州馬術の伝統の値うちを傷つけるものでなく、云うなれば、「人馬一体」という馬術の極致は、東西洋を問つのおかしなということを、私が知らなかつたにほかならない。

私は今、この年をして、商売として最も激しいといわれる international ship chartering の仕事に、しがなくも苦闘をつづけているが、もし、私に誇り得ることがあるとすれば、それは、私には夢があり、健康があるということだけ。

八十になつても九十になつたつていい、一、二頭でいい、駄馬でいい、そんな馬が放たれている、秋の陽が映える奥山つづきの丘で、静かに住み着きたい。

現況報告及び見通し

監督 佐藤 一貫

(昭三十三年卒)

収入源は、学馬運よりその飼育頭数により年間10万円前後の補助金が下りる、学校より30万前後、他は部員の部費月額一人千円0・B会より十万前後、他はアルバイト及寄附によつてまかなわれる。

支出はその65%余りが馬匹飼育費となり、後の35%程で、馬具医療費等になる、近年道路事情等の為、馬匹輸送等に支出がかさみ、競技費が以外な数字を示して居る。

一頭当り飼養費の月額は、私(33年卒)の頃とさほどの開きはみられない、現在、一万〜一・二万で飼養はまかなえる、しかし他のそれに附随する装蹄料等管理費が昔日の比ではない。

「さて練習状態は、現在のところ、古馬四頭、新馬四頭の為、一般練習は古馬四頭にて行われて居る、新馬には上級生を一人づつ責任者をつけ、阿部トレーナーの指示の下に調教を実施して居る。新馬の仕上り状況もおおむね良好である。

尚、これ迄にないカリキュラムを設けて、馬体本位に調整させ

て居る、此れまで競技会直前迄、強化練習等を行い、ともすれば選手自身の自信の弱さと、技術の未熟さを馬に転嫁して、八分目上げる事を忘れ勝ちであったが、此の秋学生選手権に於ての、苦い経験から、よつやく、トレーナー及び監督の指示が到達するよつになつた。

関東大学馬連に於ける、当部のランクは、残念ながら中の下位と云つところか、また、学馬連内に於ての評価も、何かと引き合ひには出されるが、それは伝統のしからしむるところで、実力の程はあまり芳しくなく、関東選手も女子に一名と云つ淋しさである。

今後の見通しは、頭の新馬が、戦列に加わり、現在練習及び競技に使用して居る古馬の新陳代謝がスムーズに行われるれば、相當の期待が持てる。

幸いにして、各関係方面上よりの好意により、良質の馬匹を取得し、古馬のうちの交替期に来て居るものとのチェンジもスムーズに行える見通しがついたので、現在の所その面での希望が持てる。

伊藤部長の御援助により、昨年来の懸案であつた、阿部トレーナーの件も一心、グランド要員として契約を得た、しかし、一年契約であるので、来季を如何にスムーズに更新させるかに多少の

問題が残る。

昨年初頭よりの第二部の馬術部との件は、決定的な解決を見ないままに現在に到つて居る、望去りくは一つの青山として共存共栄出来る事である。

さて、現在の我部を如何に発展させ、ひいては競技会に於て優勝の栄冠を獲ち得る為には、今後、より一層全ての面で厳しく変つて行かねばならない。

昨年、監督の重任を受けて、私なりに如何にその責を任つするか、考え模索し、未だに暗中模索ではあるが、後続の監督、及び学生達が一層やり良くなる為には、何とか地ならしをして置くのが私の役目だと、やつと結論を見出した。

その任に就いて早や二年目も大半を過こして、今新に、如何になすべきか、最大の目的である優勝を得るには、如何に練習を行い、如何に運営し、如何に馬匹の健康を管理して行かねばならぬか、馬術部の中心は何と云つても馬匹にあるので、先づ何をいしても馬体の管理が先行し、ともすれば部員個々の問題をなほざりにし勝ちである。

幸いに、伊藤部長も親身になつて部員個々にアプローチされて、

人間関係の面で御尽力を戴いて居る。

また此れは部員間に、何かと問題を起す一因ともなる事だが、競技会の出場選手の決定、学年の上下の差と技術の差、此れには簡単に割り切つて技術の差のみで決定出来ないものがある、会社に於ける賞与等の査定とも通するが、なかなか全部が満足する決定或いは結果が得られない。

上級生にはその長年月の苦勞に報いん為に出場させてやり度いのは人情ではあるが、しかし、その実力の劣るものは事、学校の名譽をかけて出場する時は人情は御法度にして居る。

あく迄も部員一人一人に出場の権利は平等にあるし、チャンスもあるが、しかし代表として選ばれる為には互いにコンピートして、始めて選手に選ばれる、日常の練習態度、その量、そしてそれに対する技術の程度、また本人の努力等、それ等を総合して決定する、と云う事は誰でも競技に出られるが、同時に誰でもが競技に出られる訳ではないと云う事を、部員各自が認識する必要がある。

日常の練習も、先づそれ等の観点から、馬本位に行い、此れ迄の、一頭の馬に数人の部員が騎乗するのは変わらないが、その運動内容を、その一人一人が、同様の並足から速歩、そして駈歩等に移行して終え、そのパターンの繰返しであつたものを、一時間或いは二時間余りの練習時間内に於て、馬体の調整を含めて、人間のそれを馬に置き香えて、馬の運動を主体に行つよつに変え

つつある。

と云う事は、もし一人の人間が馬一頭を与えられて、一時間内至二時間の運動を行う時は、例えば、最初十分間の並足、五分間の速歩、そして次の運動をと、まあ一定の課定があるが、それを出来るだけ、馬体に無理を及ぼさぬように数人でそれを実施するその日の人数と使用頭数により、臨機応変に運動を行わせる。

無論、部員一人一人にせめて三分以上の練習はさせたいと思つて居る。良い馬匹をそろえる事はどの学院でも第一に考えて居る事である。

そこで当然、各大学間は勿論、全国的に事、馬に関する情報は、私自身、学生の頃には考えられなかつた程早く流れ、また他からのニュースも私の所に届いて来る。

馬術界も情報時代の波に乗つて進んで居るのかと苦笑も出る、大学の競技会の成績は勿論、一般の競技に於ける成績も、一早くキャッチし、如何にしてその選手と馬がその成績を得たかを、その競技の内容、例えば障害競技ならば、その障害の種類、配置状態、障害間の距離等を知り、如何にして健勝したか、その馬と選手の様子を開き、また名ある選手と馬が何故失敗したか等を、様々な方面から検討を加えて、自軍の選手と馬を如何に調整するか資料にせねばならない、恐らくそれを怠つては将来健勝は勿論、上位にランクされる事もむづかしいと云う時代になつて来た。たかが学生の馬術とは云つて居れなくなつてしまつた。

さて来年度の見通しは、簡単に云えば好材料がそろつて居るので、現在のランクより上位に進出は可能かと思われる。二、三の例を挙げれば、新馬の調教が順調に進んで居る事、古馬のうち一頭の交換（即練習及び競技使用）も一応見通しがあると云つ事、無論完全に調教のすんだ馬ではないが、（まるきりの新馬と區別して）

また部員、即ち選手もようやく基礎訓練が浸透し、ごく最近迄見られた、やたらに脚をあまり、ばたつかせて馬腹を叩き、いたづらに力を分散し、馬を迷わせる仕義に陥入らせる事も見られなくなつて来た、誤つた脚の使用、背をまるめ、あごを出し、腹で反動を抜くようなものも一人か、二人になつて来た。

阿部トレーナーの日頃の薫陶が実つて来たものと思う。

此れで調教の一応仕上つた馬がそろつた時は、先づ最強のチームになると思つし、その日もそう遠くないものと思つ。

戦前、或いは戦中のOBは勿論、戦後もごく近年迄のOBは

最近の学生馬術界の流れを、殆んど御存知無い方が大半だと存じます。

先づその競技形式が、いわゆる貸与馬、換言すれば対校競技に於て、自他の馬に互いに騎乗すると云つ事は、少くなくなり、その大部分が、自馬をもつて互いにその技の優劣を競つ、自馬戦に重点が置かれる様になり、対校試合も、自馬数頭のうち、上位三

頭の成績を団体の得点とすると云つような形成になり、三頭しか出さず、うち一頭でも失格すると多大の影響を与え、また馬匹に恵まれぬところはチームも組めず、個人の入賞をねらはねばならない。

その為の良い選手を作るのは無論だが、その前に、先づ良い馬、競技へ出して人賞出来る馬をそろえる事に、どの学校もやつきとなつて居る。

四十四年度主将挨拶

芦川城次

（経営四年）

人は学び、考え、そして経験し、そこから何かを吸収し、より大きな人間に、一歩近づこうと努力する。人間の肉体は、物を食べていれさえすれば、自然に成長し得ることが出来る。しかし、その精神の成長をも期待することは出来ないであろう。それならば一体、何を食べたら成長できるのであろうか？

人が、物を食べるのに、誰れでも、まずい物は食べたくない、うまい物を食べたいと思つのが、あたりまえである。しかし、何故それが、うまいと分るのか、何を基準として、うまいとするのであるうか？ かりに、うまい物しが、食べたことのない者が居たとすれば、彼にとつてうまい物といえるのは、何んなのであろうか、そして本当のつまさというものが、彼に分るであろうか。まずい物も、食べたことのない者に、よく世間には、食通といわれる人物が存在する、そして彼らは、本当のうせさが分る人達とされている。彼らは、うまい物も、そしてまずい物も、それこそ千差万別、色々食べたからこそ、いいかえれば本当にまずい物とつものを知っているからこそ、うまい物が分るのではないかと

思つのである。

私はクラブも、食べ物と同じではないかと思つのである。馬術部という体育会のクラブに所属している我々には、部活動の最終目的は、「人間形成」に在るといつ考えを持つ場合が多くある。そしてそれは、多少言い過ぎではないかと考える者も居るかも知れぬ。

そして、学業の合い間に皆で楽しむ運動団体であると言つ者も居るかも知れぬ。が、部生活の目的は、「人間形成」又は、「人格の高揚」にあるといつのはやはりある一面正しいのではないかと考えるのである。ただし、それは目的でなく結果に、おいてである。私はクラブでも、食べ物と同じではないかと考えるのである。四年間の部活動において、時にはそれが、まずくて口にするところか、見るのもいやだと思つ事もあるかもしれない。実際自分にも、『ああ、もつまずくて喰えない』と、箸を置いて逃げ出したと思つこともあつた。上級生に無理やり、口にふくませられたこともあつたのである。

そして、俺はもつこんなまずい物を食べるのはいやだと口からそれを吐き出し、箸を置いて逃げていつてしまつた者も、我々の仲間には、多少居る。が、しかし、彼らには、気の毒にも、もう本当のクラブのつまさ、良さといつものはわかることが、ないであろう。箸を置いて逃げ出したとき、クラブの食通と成り得る権利、そして、精神の成長につながる食べ物等を放棄していつて

しまつたのである。

合理的な考えを持つ者は、周囲の状況と自分とを照らし合わせ、目的に向つて、失敗のない様に、浪費が少ない様に絶えず計算し、成功を収めようと考える。計算という舌先で、食べ物を、なめてみては、これは、食べて、うまいか、まずいか、確かめては、なるべくまずい物を食べるのを避けていくのである。それは、確かに、ある意味では、堅実な考え方であるかもしれぬ、成功への最短距離かもしれぬ、だが、失敗の味も知らぬ、彼らに、真に成功の味が分るのであるつか。

成功という言葉の裏に、失敗という言葉があるからこそ、本当に成功という意味が、引き立つのである。

精神も、苦しみ、失敗し、いじめられ、束縛され、経験してこそ、成長していくのでは、ないだろうか。

私も、もう間もなく、四年間食べ続けた馬術部を、あと少々で胃袋に納め終わろうとしているのである。そして不思議と、楽しかった事よりも、苦しかった事のみが、頭に浮んで来るのである。でもその昔しみは、今は、とても、甘り味に思われてならないのである。

こんな言葉もありました。

「良薬は、口にニガシ、しかしその実は甘い」と。

四十五年度主将挨拶

伊 納 保 夫

(法三年)

現在我々の馬術部は八頭の馬匹と四三名の人員によつて構成されているところで、この四三名の人間は何の為に、あるいは何を求めて馬術部に在籍しているのであるつか。このような観点から馬術部の目標とか、なすべき事などを考えてみたいと思う。

この四三名それぞれの馬術部に対する気持ち、考えというものは一人一人異なるものであるが、まず馬術部とは馬に乗るクラブであるということにはだれも異存は無いと思う。だが馬に乗るだけのもので有るならば、一人一人が乗馬クラブで乗るだけでよいだろうが、それ以外に何かが必要ではないだろうか、又その何かがあるからこそクラブ活動の有意義さが有るのだろう。ではその何かとは何んであるつか、これは先に書いた部員四三人の異なつた目標の上になり立つたより次元の高いものでなければならぬ。ここにおいて四三名という団体活動における制限とか制約とかが有る程度必要なものだと言えよう。この上つな制限制約の内、求め得る事が出来る最大なものこそ我々四三名の最大目標であり、またそれに向かつて進んでいかねばならないのだと思つ。

ここですこし角度を変えて試合というものについて考えて見たい。我々は年に何回かの試合に出場しているがこれに対してどのよつな心がまえで対するべきであるか。試合とは人生に於ける種々の勝負の場と同様、馬術部として一つの大きな勝負の場であるはずである。勝負である以上負ける為に出場するはずはない、それは絶対勝たねばならないのである、すこし言い方を変えれば青山学院の馬術部が何らかの試合に勝つた場合、すくなくともそれを悲しむやつがいるはずはない、それは何らかの形でつれいはずである、これは部員四三名に通ずる絶対確実なものである、

いやそれ以上に数百名のOB・OG・クラブ関係者その他にとつても同じであろう。このような意味から試合に勝つという事が先に書いた何かに結びつくのではないだろうか。だがしかし試合となると出場出来る選手は四三名の中のほんの数名に限られるという事が問題になるように思われるかもしれない。だが試合というものが出場選手だけのものでは決してない。それは部員個々の毎日の部活動の集約として試合に出場するのだからではない。すなわち日々の個々の活動馬の手入れ、練習、その他の努力の一つの表現として部員全員が一団となつて試合に出場せねばならない。それでこそ先に書いた何らかの形での嬉しさと言つ漠然としたものがはつきりした形になつてくるのではないか。ここに一つの思い出を書きそえて一つの例にしたい。それは僕が一年の時のトーナメントである。それは今と違い十二月に行なわれたが、そ

の厳しい寒さの中で夜も明けやらぬうちに練習というきつい合宿の間に全員がまとまり一年からは僕一人だけが選手として出させられ淋しい立場であつたが、皆に励まされ、皆がまとまつて試合に望めたということは非常に心強かつた。また試合においては、勝つたびにまとまり、まとまる毎に勝つという一試合毎に盛り上つて部員一人一人の内に燃え上がるものがあつた。この事は三年以上のものなら心に残つていと思う。この結果は決勝で勝つ事が出来ず三位に終つたが、今でも何んとも言えぬものが心に残つている。

ここで言いたいののは勝つと言つ事が決して目標ではなく、単なる一つの手段では有るがその重大さを心にとどめてもらいたいのである、そして勝つと言つ事は並大抵の事では無いと思う。ここ数年我校は、パットした成績を残していない、それには、自馬競技に重点が置かれるようになった最近の学生馬術界に我校が他校に一步遅れをとつていのではないだろうか。まずその一步を乗りこえる為努力と試練にぶつからねばならないのではないだろうか。すなわち人以上に成るには人以上にやらねばならないのである。ここにおいても一つの制限制約というものが生まれて来るだろう。

ここで話を元にもどして考えてみると試合に対する態度と馬術部に於ける何かがまるで無関係ではないと言つ事はわかつたと思つ。ただそれはその中の部分で有り、すべてではないだろう。

ところでここまで進んでくるうちに制限制約という言葉が必然的に出て来たが、制限制約というものは何もありはしないが、その意味するものには何かがあるとと思う。制限制約の中にある自己を見つめることによって何かが生まれて来るたろう。それは制限制約と自分との戦いではなく、自己における自分自身の内なる葛藤であろう。己自身にうち勝つより前進した新たな自身身を作り出して行く場としてのクラブこそ我々の求めているものである。だがこれ自体も最初に言った何かの一部分にかすぎないのである。

ところで今まで考えた事は馬術部以外のスポーツクラブで合い通ずるものがある点であるがここで馬術そのものから考えを進めて見たいと思う。馬術の馬術たるゆえんは、柔術が柔道に、剣術が剣道に変った現代において単なる馬道となり得なかつた点に有ると思う。すをわち馬術とは単なる乗馬とは異なりそれ以上のものが有ると言う事である。私なりの馬術歴及び阿部先生に接する事により、馬術における深さ、すなわち人生における所の深に合通じる何かがあると云う事は、ぼんやりとはわかつては来たものの、それが何んで有るかはずたかわからないのである。この馬術における深みこそ最初に求めた所の何かに通じるものではないかと思う。

色々とりとめの無い事を書きつづけ、また全く文にまとまりがなく、何が言いたいのかわからないと思うが、これは書いてる

当人も同様であるので、悪く思わないでほしい。

ところでここで書いた事が最初に求め始めた何かに対するコメントになってくれれば幸いである。その何かについてはそれぞれ一人一人が、考えてもらいたい。そして卒業した時にでもその何かの有ったのだと思っただければ良いのではないかと思う。

会計だより

会計 六平 潔

（経営三年）

馬術部にアルバイトはつきものだ。僕のクラブ生活もバイトに追われたと言っても過言ではないかもしれない。今考えると、楽しかった思い出とも言える。

一年の時から、競馬場のアルバイトは、僕の学生生活の日課となつている。今のようになれつこになつてしまえば、なんといいことはないのだが、一年の頃は、学業とクラブを両立させて、カッコよく学生時代をすごそうなんて考えていたので、授業をさぼつてまでのバイトが苦でしよがなかつた。後期などは、金・土・日曜と競馬場へかよつて、寝ワラ作業をやつたものである。女子四、五人に男子四五人がその日のメンバーである。馬に接することができるといふ点では楽しかったが、仕事そのものは、あまり面白いものではなかつた。

そのようなバイトではあつたが、僕の楽しみというのは、その日の女子のバイト者が誰であるかということであつた。別にこれといって好きな人がいたわけではないが、かわいい女の子と、厩舎の部屋で、ひまな時に、雑談するのは、楽しかつた。授業をさぼっていることも忘れて、世間話に、つつつをぬかすのも、青

春時代の貴重な時間のような気がした。

いま三年となつて、バイトの日数も少しへつたが、やはり馬術部のバイトは続く。

会計となつた今、金銭的な意味で、アルバイトの必要性をつくづく感ずる。前年度の馬術部の総収入は、約二六〇万円であつたが、その1・5以上が、バイトによる収入である。

上級生となつたいま、下級生を使つ立場であるが、大事な青春時代を、競馬場で、すごさせるなど、本意ではないが、頭を下げて行つてもらつてゐる現状であります。

部員のみなさん、ご苦労さまです。でも君たちの貴重な時間と労力をさいたこの馬術部で活動しながらの青春というものは、価値あるものと信じてつたがわらないのです。

しかし、金があればなあ……。

随 想

私の思い出―夏期合宿―

部長 伊藤文雄

私が馬術部の部長に就任したのは土田教授が経営学部で学部長に就任されたこの四月からである。大学の異常な事態において私が先生にご協力申し上げることが馬術部の部長を引きつけることになった。

私は馬に乗っても、せめてコルトくらいである。この一年間をふり返ってみて特に思い出されるのは夏期の合宿の事であろう。

男子の白井合宿に私が出かけていったのは最終日の前日である。四年生の幹部全員を集め合宿生活の報告を開いて驚いた。怒るにも怒れなかった。近所の農家の人達も今年のナシの不作を嘆いた事であろうし、また若いアベックも落着かなかった事だろうと思ふと申し訳しなかつた。その反面、ソフト・ポールで真言な顔をしてポールを追い、警察官そのけの敬礼をして練習し、一生懸命にやっているのを見て安心した。しかし、何と云つても私がにナナめられて無理矢理に馬に乗せられた事がいつまでも残っている。私は私を馬に乗せ、サツサト離れていつてしまった。所が急にピカピカときて馬は驚き、駈け出した。あの時程こわか

った事はなく、それ以来の誘いには一切応じないこととしてゐる。

女子の大浜合宿でもいろいろな思い出がある。海に面した堤防に腰掛けながら学生と話したのも一つの思い出である。練習でも、一人一人が思い思いに着飾った乗馬姿は何とも云えないものがあつたが、どの顔も真剣そのもので、時々ハブニングもおこり、結構たのしませてくれた。しかし、夜は逆にクルクル・パールの踊りをさせられ、夕食に飲んだビールが全身をグルグルかめぐり、帰京の時間はせまり、やむをえず午後十一時頃東名高速にのつて無事に帰つてきたが、途中で何度も睡魔におそわれ、無事に帰れたのが不思議なくらいで恐ろしい思い出となっている。

体育会の各クラブはタテの社会の典型的なものである。私がこの社会に入り学生と共に軍隊式組織のなかで規律を守り、お互いに理解し合つてやつてこられた事をうれしく思っている。学生とその心を思えば思うほど部の発展のために奮起せざるを得なかつた。短い部長期間であつたけれども、学生諸君の純情な(?)偽りのない心にふれる機会がもてたことは私のよい思い出となつていつまでも脳裡に残つていくことである。



たばこ

副将 曾 我 正 晴

（法三年）

入部したての頃「馬術部とタバコは切り離せない」と聞いた事があつたがその通りだつた。朝、網島駅から馬場まで、又昼餉を付けて一段落付けた時必ずタバコを吸う。このクラブの作業は重労働でないにしても、だから長いものが多い。それに変化を付ける為にもタバコは必要だと思ふ。午前中は、他馬が多い。皆と別に午後から馬に乗り、運動の後、馬を休ませながら馬上で吸う一服はかくべつである。又、練習後、馬房の裏手の便所で一服しかしなんと云つても全経路を満点でゴールした後の一服こそ一番おいしいタバコだと思ふのだが……。

「原稿を書く前に……」

梶 洋之助

（昭六年卒）

やっぱり行って良かったと思つた。

それにしても、学校の角を曲つて青学会館の青いネオンが見え

て来ると、なんとをく抵抗を感じて来る。これは、わたし一人なのだろうか。学校へ入つて行くときは、赤レンガのガウチャーホールが無くとも、右手に一ぱいに道路添いに、四ツ糞のクローバーを採つた芝生の庭が無くとも、又震災後に出来た講堂が、現在の売店や食堂に建變つていても、又、また、わたしたちの在学当時には見られなかつた、女子学生が、三三五五と歩いていても、昔変らぬ学院の感じが、身にせまつてくるのである。

これが青学の学園なのであるうか。

それにくらべて青学会館は、なんと、まるで未知の人を初めて尋ねる時のような違和感が感じられることか。これが青学会館へ行くたびに、わたしには感じられてくる。

十一月二十一日に脇坂君から、戦前の〇・〇の会合の案内を受取つたときに、良い企画してくれたと、わたしは非常に嬉しく思つた。このところ緑鞍会などの行事にも、戦前の〇・〇は殆んど出席されなかつたからである。

当日会場には青木正副会長をはじめ、井上、緒方、伊藤の方々その他諸先輩が出席されて居られた。これらの諸先輩とは久々の出逢であつた。在学当時、習志野の原を駆け廻つた仲間である。いろいろ当時の想い出話も出て、たのしい一ときであつた。

そもそもわたしが初めて馬に乗つたのは大正十一年の春であつた。当時、中学部に坂本与三郎先生が居られて、わたしたち乗馬希望者の十四、五人を習志野の騎兵第十四連隊へ、つれて行って

下さったのが、最初であった。

この時には不幸にして、仲間の一人が事故を起してしまった。これは中学部で大問題となった。しかし、初めて乗ったわたしたちを、馬に馴れさせるためと、いきなり遠乗りへ連出した軍隊の教育も、さすがに軍隊らしい荒っぽさがあつた。そしてその荒っぽさが、わたしたちの心をアタックして、それ以来、日曜日になると必ず、同好者四、五人で習志野通いが、はじまつたのであつた。

さて本筋へ戻つて、O・B会も無事に散会しても、なかなか話は尽きず、渋谷駅での別れを惜んだものだった。

そしてその翌日、「いななき」の原稿を依頼されたのである。丁度暮を前にして会社も多忙を極めている時期である。原稿の期限は一週間足らずの短期間なのである。これではまるで試験勉強の一夜漬けと同じようである。さすがに若い人の企画らしいかわたししさである。わたしは原稿の確約は与へなかつたけれども、何か着いてやらなければ、ならないだろう。

福島遠征

小森谷 正子

(短大一年)

福島は寒い寒いと聞かされていたから懐炉を二つ持参する。Tさんなどは五つも持つて来る用心の良さだ。途中、列車と車が衝

突するといふハプニングがあつたため、福島駅に着いた時はすでに日がとつぷりと暮れてしまつていた。さすがに凜冽な空気が身を引き締める。宿舎は想像していたより上等なもので、マイホームを離れて来た心を和ませてくれる。

朝、競馬場には育成馬が放たれ、前を走るリーダーの後を一生懸命に走っている。まだ小さくて可愛い馬ばかりだ。試合に使われる馬は、黒い馬が白い馬衣を着たようなニュースタイル号、重そうでいて良く飛ぶ美喜太郎、飛びそうで飛ばないブランド、すべての癖を持つ馬と知らされた盛郎など九頭。

過去・団体優勝五回、個人優勝十回という輝かしい記録が重たい、勝たなければならぬという使命感、過去を背負つた奴隷、試合を見ながらしきりとそんなことを思う。鞍が背から腹へ回つてしまつたり、鐙が切れてしまつたりのハンディにもかかわらず、ついに優勝、嬉しい皆の顔がほころぶ。やつた、という充実感と目的を達した後の虚脱感がいっしょになつてやつて来る。

宿舎ではフトン蒸しが横行、誰彼かまわず部屋に入つて来た人を片端からやつつける。ミーティングの後、前キャプテンも亦、

このすさまじい洗礼を受ける。何をやるにも優勝したことでみん



なの心は明るい。もし負けていたらこんなことは有り得まいと思つと、勝つたのだという感慨が新たに湧いて来る。

翌日行なわれた個人戦は惜しくも三位に留つたが、団体優勝というバックアップがあるから素直に甘んじる。帰りに、昨日もお結びをか世話になつた先輩からか昼を御馳走になる。・・・一路東京へ。

福島は何と言つてもいい、空気はきれいだし、人情は細やかだし・・・来年も又、こんなことをつぶやきたい。それには来年も参加すること、そして勝つこと。輝かしい過去を背負つた奴隷よ、明日に向つて遅しい一歩を踏み出せ！

「大学紛争の中で運動部の学生は どうしたらいいのか？」

石 割 陽 子

(昭三十五年卒)

馬術部への寄稿なら、やはり、馬に関する思い出、あるいは、これからのことなどが、一番ふさわしいと思う。しかし、最近の激しい学生運動の中で、後輩諸君、諸嬢に、のんびりした、懐かしい、良き学生時代の思い出など、今、話したところで、果してピンとくるだろうか？ キリスト教大学の青山にも、時代の流れ

は、激しく押し寄せ、追つてきた。一九六八年、共闘派学生による、初めての学校封鎖、八号館の籠城、そして、最近では、学校側からのロックアウト、検門所の設定、学校に備われたガードマンと講師との間のもめとなど、おそらく、二、三年前までの卒業生には、想像もつかないような動きが、いろいろな点で、学園の中にある。学園紛争の中で、運動部の学生は、唯、ひたすらに練習に励んでいればよいのだろうか？ あるいは、学園紛争を無視できず、積極的に参加すべきなのか。運動部の学生といへども、学園の改革(時には改悪かもしれないが・・・)には、無関心でいられをいかもしれない。それなら、どのようなかわりあ一方をすればいいのだろうか？ 運動部は、自己鍛練の場であり、それは、精神的にも、肉体的にも、強さを要求される。マスプロの授業、あるいはクラス大編成からは、なかなか、えられない、人間関係の獲得、すなわち、厳しい鍛練の場から、生みだされる、真実と、グループの中に於ける個々人の協力的態度の育成などである。体育会に属している運動部の学生は、学校対学生の問題において、時には、学校側のガードマンのように思われることがあるかもしれない。しかし、それは、誤まれる印象であつて、必ずしもそうではない。むしろ、そつであつてはいけないのである。運動部で、対抗試合、あるいは、競技会に参加する時は、自分の学校名の下で、臨むかもしれない。そして、自分の学校の為に(も)、戦つかかもしれない。しかし、厳密にいえば、それは、

自己との戦いかいであるともいえる。

学内紛争の時も、自己の練習はやるし、又、勉強もやる。しかし、紛争の真実や意味を知るための、積極的参加は、当然なされて、然るべきであると思つ。スポーツは、前にも述べたように、心身の鍛練と、フェアな精神を、養なつと思つ。そういったものによつて、ゆれ動く、大学の正しい在り方を真摯に見つめてほしいのである。判断し、決断し、行動するのは自己である。そういうことも、できるような運動部の学生であつて欲しい。そして、正しい学園の在り方を支える強力な担い手の一人となつてほしい。それには勇氣と、強い心身が必要なのだ。若さと、情熱は、それを支えるだろう。

“ 自己の慾求 ”

安田 義生

（理十四年）

春夏秋冬、いかに天地自然の力とは言へ、かくも明瞭なる時の流れを振り返る時、その流れの迅速さには今さらながら驚かされる。この四年間を振り返つて、こ多分にもれず一喜一憂の変化の目まぐるしい四年間であつた、我々内外交流の場として馬術クラブを考えた場合、一体何をすべきか……対人関係についていうな

らば、自己の欠点を見出す場として、そしてその欠点を改める場として又、自分の才能を伸ばす場として、そして、その才能を試す場として活用しつるものではないだろうか、上級生に対する態度と下級生に対する思いやりのある人構えは、元より一般社会人に対する態度は自己が学生であるという未完成的な社会人であるがゆえに、十分学び研究せねばならないし、又そこには十分相通ずるものがあるはずである、こうした対人関係、特に一般社会人との接触は教室では学べないクラブの特権であり、クラブの意義が見い出せるはずである。従つてこの小さな社会であるクラブを自信をもつて利用し、活用出来るのである。そこで一つ守らねばならない規律がある。それは団結しなければならぬ義務、こつこつ意味に於いてもこの小さな、小さな社会の別な意味の意義がある。

試合で相手方より一個多く障害を飛ぶことより、自己の欠点を一個多く見い出す方が、はるかに貴い、自己の欠点を見い出すには、人のふり見て我ふりなせ”一つには失敗をしてみなければ気付かないことが多い。従つて今のうちに大いに失敗（試験を（つめ）してほしい、小さな失敗の反省の伴つた積み重ねは、その後大きな失敗に十分対処し得る実力がつくと思つ。失敗は成功のもと、ちょっと古いかな、負け惜しみの様に受けとれるかもしれないが、この誠の意味を十分納得した上での失敗は何の苦にならないはずである、それは経路違反をし、帰路につく場合皆に

すまん、すまんと、考えつつ、後日、満点で帰路につく場合と同じ様なものである、最後に、私は、馬術クラブで学びつつた事は、三つ、一つは、魂、これはすごく範囲が広いのですが根性、誠（素直に表現する）etc、二つ、知性、人間すべて頭で考え（あたりまえ、！そう、そうです）良く練った上で、前記でも記述した様に馬に対しても同様であります。三つ、和、言つまでもなくチームワーク、団結であります。この三つ、称して、魂知和、”コンチワ、魂知和”です。小さな社会から、大きな社会へとバク進するにあたって、必要かつ十分条件であると私は思うのであります。

ある日

大塚 まり子

（昭四十四年卒）

彼女は、ハツとして、思い出しました。「いけない、外に洗濯物をほしっぱなしだわ。」彼女は、あわてて外に出、洗濯物を取り込み、ふと、上を見ると、水色がかつた真黒な空にまるで、自分が東京にいるということが信じられないような無数の、そう……まるでつららの先っぽのような星が、ピカピカと光っていました。彼女の時計が一瞬止まり、次の瞬間には、誰れかにその事

を教えたくて、むずむずして来ました。そして、呼吸をしているのがつらくなる様な空気の冷たさのせいかもしれません。あわてて家の中に飛び込み、見廻わしても誰れもいません。ただ彼女を迎えたのは、大きな犬と中位いの犬と、小さな小さを犬だけでした。でも彼女は、いいたくて、むずむずしているので、その大、小、の三匹を、ポカポカとあたたい、マントロピースの前に集め、大中小対彼女の会話を始めました。「とつても星がきれいなよ、「星」なんていつては、もつたいないようよ、だから「お」と「様」をつけて、呼ばなくてはね、大、中、小、は、これも又大中小の六つの目をキラキラさせました。私が今まで見たお星様のなかで、一番なのは、三年前に軽井沢で見た空夢様な空は、まるで、銀色のメッシュみたいだったのよ、夜の空は、黒いでしょ、でもそれが、まるで、銀色に見えるの、あの人と二人で見上げて、何度も溜息をつき、あの人の中に銀色の空を見て、言葉が出なかつたわ、だから、私には、とてもとても、ねうちがあつたの、でも、今日見たのは、黒地に、銀の水玉模様だけだ、私は、軽井沢でなく、東京に居たのですもの。」

彼女の、馬術部生活から離れてからの、数少ない、おどろきとよろこびでした。

我が友人丸秘録

青木京子

（教育四年）

毎朝二つの目覚し時計でとび起き、階段をころがりながら着替え、ひたすら走った四年間。おそろしい事に、もう四つも年とつてしまいました。どうして四年間も馬術部を続けていられたのか自分でも不思議な位ですが、一つには、良い（？）同級生に恵まれたことかと思えます。では七人のプロフィールをごく簡単に述べさせて頂きますと、まず

芦川城次君、言うことは大きく自信過剰で、おまけに、ひねくれている。これは、きつと幼い時の愛情不足が原因ではないかと思われまふ。四年間会えばあきずにケンカしたもんです。でもジョー君、私は発見しました。ホントは、内気で小心な良い青年で、やさしくつて、テレヤで、おまけに思いやりまであることを、ちよつとホメナギかな？ ほめるとすぐ、ずのるのでこの辺にしないで。でも、バツゲンに頼りがいがあるんです。ホント！

下級生には、おすすめ品ですよ！
川嶋透君、年の割におそろしく若い。（異常と言っても決して言えずぎではない）ふだんも、しまっている方ではないけれど、女

の子には、ゆるみつばなしで、しまるところを知らない、めずらしいタイプ。いじめられて喜ぶという普通人には理解できないところもあるのだ、ためしてみるとおもしろいでしょう。時々馬場で見せる、焦点の定まらないヒトミと、半ば開いた口もとは、彼の異常な性格を物語っているのです。でも、信じられない位やさしくつて、いい人なんです。

里中郁男君、これまた、女の子には最高にやさしい。八人の中で一番温厚で博愛主義者、飲むとすぐ、のっちゃう安あがりタイプです。そうすると、聞くにたえな歌を好んで歌いたがつて、困るんです。私なんぞは、いつも、まあまあと、止めるのに苦労したもんです……。

安田義生君、馬術部四年分校在学中。すごくマジメかと思つて、それがとんでもない！ 下級生を好んで○○○に連れて行くとか。ホントに困つたもんです。肥満児協会の会長も兼ねていて、四年間に及ぼした馬への被害は、言葉では、とつてい言えないほどだと思われまふ。でもクラブの問題などでは、いつも相談にのつてくれて、真剣に考え、答えてくれたものです。

環誠君、人も知るマダムキラー。以前は緑鞍会の仕事をしていた。おつちよこちよいの善意人間です。テニス部の○子ちゃんと、つきあっているんですつて？ みんな知つてまア・す。気が、めいている時でも、環君のそばにいれば、楽しくなつてくるんです。管内道子嬢、四年間、お互いの知識を広め、教養を高めてきた仲

です。身体的発育は、かなり遅れ、やっと小学五年生並みだけで、精神面では異常をほどの発達と好奇心を見せ、大人のことを必要以上に知りたがり同時に、たゆまぬ研究を続けています。これでもつすぐお嫁に行くなんて、これまた、おそろしいことです。これなら私だつてとみんな自信を持ったでしょう？ 下級生の時には、一緒に泣いた仲です。もう今は何にも言わなくても、全て、わかつているのです。

桐山令子嬢、「きりやん」の愛称で二年のつきあい。馬に乗った時の、しぶとさは有名、根生の人なんです。二年間も、どうしようもない我々とききあつてくれ、まるでか姉様みたい……。というのは、オーバーだけど、とにかく良く出来た人間です。どっちかというと、ムツリ○○○○だなんて……。きりやんゴメンネ。

そして私、内気で無口で、言うことも言えなかったものです……。なんだかんだ言つても、みんなとつてもいい人でした。以上七人の仲間と、素直（？）で、かわいい（？）下級生と、大好きな馬がいたから、それで、きつと四年間クラブにいたのでしょつ。

三匹の女^{ニヤ}ロメ

川島 透

（法四年）

いじめられる事に、喜びを感じるとは、青木ニヤロメが、我が輩を称した言葉であるが、いや決して喜びを感じるわけではなく、じつと絶え忍んで来たのである。このように我が輩と四年間を共にした三匹のニヤロメは、その間我が輩をいじめ抜いて来たのであり、よつて我が輩は、ペンは剣よりも強しなる語を信じて、最後の抵抗を試み、ペンを取つた次第である。

もちろんこれが続んだ後の三匹の形相を想像すると、頭が重いのであるが。



青木京子

いたずら好きの黒猫である青木ニヤロメは、我が輩をいじめる三匹の中のボス的存在である。自からが發起人となつて肥満児協会なるものを作り、その副会長に納つていたのである。

（会長は安田君）。

我が輩とはかなり親しく付き合つているのに、我が輩との噂は皆無という、確かにお互いに、ただの部員同志でしかないのである。そして、我が輩は、このニヤロメを男の友人と同様に付き合い、扱かつてきたのである。なんとなれば、このニヤロメ、男性のごとくたくましく、また滅法気が強いのである。こんな例がある。今はなき青蒙に乗つて障書を飛越していた時、めつたに落馬しないこのニヤロメが、すさまじき落馬をした、そばの者がかけよつて心配したが、スクツと立つと、ややムツとした表情で曰く「はやく青蒙をつれてきてッ」と。

そんな彼女ではあつたが、なんとある日メソメソと泣いたのである。私とデパートのバイトをしていて、なんでもオールドデパートガールにいじめられたらしいとかで、その時青木ニヤロメもまた女かと感じたのである。

このよつに書くところ、この黒猫は、いかにも無骨者といった印象を抱くかも知れないが、気はやさしくて、本当にいい人なのである。服装などのセンスもなかなかで、部の男性の人気も上々である。

最後にみんなの一致した意見を述べよう、それは、彼女を女房にしたら最高である。

管内道子

このニヤロメは、おちゃめなみけ猫であり、青木ニヤロメとは反対にゴリゴリとやせている。

このみけ猫のあだ名は「ブス」と呼ばれている。といつても決して「ブス」ではない、いやそれどころか、みめ麗しい乙女である。一年程前に馬場にメス犬がいた、誰がつけたかその犬の名は「ブス」と言い、なんとなくこのニヤロメがこの犬に似ているという所から出たあだ名らしい。

我々は綱島駅からの長い長い道のりを歩いて馬場に通うのだが、このニヤロメは、ロータリークーペなるものを乗り回して、馬場にお着きになるのである。

なにしろ活発で、チャカチャカとしているので、ついついからかいたくなるのである。また、からかえば、その反応も大である。そんな性格なので、このニヤロメなかなか男性にモテるようだ。協会幹事をやっていたせいもあるが、他校の部員との噂もチラホラあつた。

ではあるが、なかなかおつむの方も良い。こんな事があつた。このニヤロメと我が輩は学部が同じなので、試験も同じ課目が多かつた。私は前日徹夜で二百題近い英文を暗記して英作の試験に臨んだ。十問の内八問はまあ出来たが、あとの二問は思い出せない。

かつた。後に座つていたニャロメは、あまり自信がないと言つていたし、残り時間が大分あるのに、居眠りなどをしてあきらめていた様子なので、そこはフェミニスト、答案をずらして後のニャロメに見せてやつた。答案を出す時、ニャロメの答案と見比べると、私の分らなかつた二問まで全部書いてあつた。またこのニャロメは、全然出席したこともない課目もちゃんと取つているし一単位すらも落した事がないという恐るべき頭を持つてゐるのである。

ではあるが、このみけ猫ちゃん可愛らしく、朗らかで、とても楽しい人間なのである。

桐山令子

このニャロメは、おとなしくて、品のいいベルシア猫である。このニャロメの特徴は、几帳面で、スローで、そしてタイプとしては、秀才塾に属そつ（英文科である）。

なにしろスローなのである。我が輩は非常に早々なので、ゆっくりと口を開くこのニャロメと話をすると、まったくスムーズに進行しないのが、我が輩の悩みである。しかしすべてがスローと一つではない。彼女は二年生の時に入学したのであるが、技術をマスターするのが非常に早いのである。そして一年のハンデを克服して、とうとう体育会から敢闘選手に選ばれてしまったのである。

またこのニャロメは、本当の真面目人間なのである。ふしだら

なものをみると、顔をポーツと赤く染めて「私にはとても信じられないわ」というのがニャロメの口ぐせである。しかしそれも、青木、管内両名の手によって、少しずつ変化しつつあるようだ。そして、このベルシア猫も最近ではハンドルも握るといふ。とにかく、不言実行型で辛抱強く、このベルシア猫もまた、最良の女房タイプである。

思い出すままに

沈 廻 浜

（昭二十八年卒）

「昔は良かった」という言葉を私は学生時代によく聞いた事がある。その時にはそんなものですかねと不思議に感じていたが近頃になって私自身がそういう言葉を口にする様になった。勿論私という昔とは学生時代の事であるがたしかあの頃は良かったと思つてゐる。

昭和二十六年頃の馬術部は今から考えてみればとてもお粗末なものでも今とは比べものにならない。馬はたゞの一頭だけ厩舎といつても当時学院の工事をしていた藤田組からセメントの枠材を貰い受けそれを自分達の大工仕事で作つたみすばらしいものだった。

予算もとぼしかったので各人がそれぞれに人参やら塩やら薬やらを家から持って来たり、ドングリからパン屑、秋月さんからそば湯を買ったりとまるで賣い屋の様な部であった。

併し部屋が学院内にあつた為授業の合間には皆集まるし馬の世話も当番以外に皆でやれたし、練習も午後の授業が終つてから、そしてその後でミ・ティンク等、部が我々の寄り処となつていた事は誇れると思ふ。そしてこの粗末な部室ではあるが、中には将来に対する夢と情熱で燃えていた。昭和二十七年に今は亡くなられた亀徳先生や部長の土田先生の御尽力によつて、今の校友会館の処に本建築の馬房が建てられる事になつた時は本当に嬉しかったものである。そして先輩諸兄が尋ねてこられ、練習をみてくれたり、手入れが全部終つてからの一杯のワドンのなんと美味かつた事が、これらは思い出しても壊しくてたまらない。この点は今の立派な厩舎、馬場、部室と揃つている現在よりも恵まれていたのではないだろうか。

私も学院を出て以来十数年になつてしまつたが部が綱島に移つて以来とんと足が遠くなつてしまひ現役の人達ともあまり話す機会が無くなつてしまつている。前の様にいつ行つても部員が揃つて居り、夜の部室で語り合う事がなくなつてしまつた事は本当に残念に思つている。

かつての昔の時代を過した人達とは、今に至るも年に数回集まつて旧交を暖めてはいるが、これが出来るという事はやはりその

時のなんともいえないつながりが一本の糸として通つている様な気がする。

思い出話を書いてくれとの事なのでつれづれに綴つてみたが、「昔は良かった」という言葉が出る様では私も年寄りの仲間入りをして来たのかも知れないな。

恵まれた現役諸君の御発展と奮闘を祈りてます。

青学馬術部の或る時期

伊 藤 芳 富

(昭十八年卒)

過日、戦前OBの会合に出席したところ、現役時代に交流のあつた年代のグループ毎で、共通の話題も異り、自然と夫々の集りに分かれてしまふ傾向がうかがはれた。これは当然のことで、私達の昔話も自分達の懐しい思い出にすぎず、他の先輩後輩の方々には他人事に近いかと思はれるが、然し我が馬術部の半世紀に亘る歴史の一コマとして聞いていたゞきたい。

私達昭和十五年四月から十八年九月在部の仲間は同期九名で、其の頃としては最も部員の多い学年といえた。今ふりかえつて考へると、其の時期は軍国主義の頂点であり、所謂住みにくい時代であつた青山学院には比較的自由な気風が残つていたとは申せ、

配属将校等を通した軍の或は直接世間の厳しい目が学生の行動を規制し萎縮させた中で、馬術部は一種の盲点に入ってかなり自由に振舞った。即ち、馬術を身につけ馬匹の扱になれることは、直接間接に軍務の基礎訓練につながり、他の運動部のスポーツとは質が違ふという隠れ養的名目が通用した。従って、他部の連中は色々ほかに気兼ねして居るなかで、我が馬術部員は、当時としては派手を色の乗馬ズボンもさうさうと、女学生の注視を受けて（自分達だけ勝手にそう思って居ただけで実際は無視されていたらしい）街を横行し、適当にアルコールドリンクを飲みあるき、場合によっては練習用白衣だけで帽子をかくし「青山一丁目にある陸軍大学の馬丁だ」と称し「学生か断り」の酒場へ乗込んだりして、許される最大の自由をエンジョイした。然しその報いか、我等仲間いづれ劣らぬ酒神の従僕となり果てた。当時は青山学院はその主義主張から、現今では想像も出来ぬ程厳しい禁酒禁煙で一寸でもみつかると忽ち一週間位の停学といふ有様の中での飲酒は、スリルを楽しむといふ要素もあつたと思う。左様な次第で合宿もなれば、昼間の練習にも劣らず、夜の酒宴と後輩への酒の訓練は熱心に行はれ、我等年代の暗黒時代の青春を馬と酒で色どつて来た。具体的に名前をあげて、エピソードを語れば話は尽きぬが、何かと差障りのある向も居るので、それはいずれ将来部史編纂のこともあらずその際にゆずることとし、其の際には豊富な思い出の資料提供を約束して筆を擱く。

Ⅱ 合宿記 Ⅱ

白井での合宿

小林正樹

（法二年）

夏休みも残り少なくなった八月の太陽を浴びて、ほくは白井にやって来ました。

いくつも、いくつも立ち並ぶ厩舎の一角に、僕達の合宿生活が始まるうとしていきます。

ゴン、セイシ、グレート、ハクセイ、セイコ、イリザ、ブルネン、それにラックストーン、みんな元気に白井の土を踏みましました。

朝です

六時です

お早ようございます

一年生は飼を

食事当番は朝食の用意を始めます



厩舎の中から

上級生が

一人きて、二人きて・・・

円がつくられる

朝つゆのおりた中庭で

朝の体操が始まります

体が暖まると

寝ワラ作業

こつこつして

白井の二日が始まるのです

朝食をおえると

午前中はアルバイトの土方作業

みんな、手に手に整地道具を持ち

仕事場へ向う

ぼくの仕事は、

走路脇の草取り

もつすぐ秋たというのに

太陽はまだ暑い

汁が目にしみる

じらい

「じつじつとくすくすくすええ」

人夫の一人がいった

「フーッ」

思わず嘆息が洩れる

さあもう一息だ

またシャベルを持って・・・

お昼です

昼食です

十二時を過ぎたころ

食事当番が呼びに来る

みんな汗だく

「今日は何だ」

いつも一番先に聞くのが飯野さん

カレーライス

サンドウィッチ

冷やソーメン

色々だ

自分達で作った「欠作」ばかりである

おいしかったネー

「ごちそうさまでした」

午後は三時半まで自由時間

ほんとは

昼寝の時間なのに

「全員集合！ッ 野球やるぞ」

なのです

四年生がスポンサーになり

ユーラ争奪の大熱戦

ホームランも出た

サヨナラ勝ちもあつた

勝つても負けても

下級生はコーラが飲める

四年生は必死です

午後四時

「集合！ッ」

大きな馬場に

全員が一列に並ぶ

練習開始だ

一年生が一鞍目に乗る

この合宿は選手主体の合宿のため

一年生の鞍数は少なかつた

しかし充実していた

苦しかった澄上げ

タイミングの難しい障害飛越

でも楽しかつた

自分の影が消えるころ

練習がおわります

馬の足を洗い

寝ワラをしまい

ふつと気が付くと

もっ、あたりは真暗

夜になりました。

上級生から順に

お風呂にはいるのです

一日の疲れを

お風呂が忘れさせてくれるのです

でもそれは上級生だけ

下級生は一番後にはいるから

急がなければなりません

風呂から帰って来ると

もう食事の用意ができています。

一日で一番

楽しい時間です

当番が腕によりをかけて

作った夕食

いただきまーす

食後、一休みすると

ミーティング

一日の反省

注意

馬学

雑談

これが白井の一日です

でも一年生は

これからまだ沢山仕事が残っている

長靴磨き

夜飼

ナシもぎ

そして一年生は

ナシをかじりながら



ふとんの中で

一人、一人

思い思いに

明日を待つのでした。

おやすみなさい……。

合宿の思い出

溝井周子

〈史学二年〉

柿やみかんのおいしい頃になりました。蛇やカエルが冬眠する頃になりました。馬も冬眠すれば、この寒さの中に身を卦く事もないでしょう。ところで、冬眠とは縁の薄い真夏の合宿のお話。合宿とは、私をして言わしめれば、一週間がやっばり七日であり、一日はやっばり二十四時間であるという事をつくづくと感じる事であり、自分が女である事を忘れてしまう事であり、ロアーのクリーム・アンミツがなんとつかしく、はかない物である事を思う事であり、夏はやっばり暑いという事であり、陣中見舞に来てもくれない人を冷たい人だとつらむ事であり、酒や煙草がなんと懐かしいものであるかを思う事であるのです。そしてつく

づく馬に乗る事が、悲しく思える時なのです。

今年の合宿は歌で始まり、歌で終わりました。まずは、ノー工節合宿所の原川さんが教えて下さったのです。歌詞がとにかくいいんです。粋なんです。一富士の白雪ノー工

白雪がとけて流れてなんとやら、娘島田は情でとける」とい

かく、この箇所がいいんです。網島から富士を見るたびに思っています。これだ。これだ。さて、お次は、四年生のたつての御

要望により、あくまで先輩中心に作詞した男子に捧げる歌です。

下教生が「止めて下さい。」と泣いて頼んだのた、我々を、あし

げにしてまで作った詞なんです。男子が陣中見舞に来た折、泣

きの涙で歌ったものです。極品の良い一部を披露致しますと、

「チチラ、カンチラ、学校さぼって網島へ行けば、馬術部の男子

が色目を使う、あげたいな、あげたいな、青字美人だよ、馬術部

の男子と花火をあげたいな、花火を一緒にあげましようね、と

いっだけの歌だと我々は信じてやまないのです。このようにいか

にも馬術部らしい合宿を経て、現在にいたっている私達です。

そして今は、やっぱり柿とみかんのおいしい季節であり、そろ

そろ、おデン、爛酒のなつかしい頃なのです。

上級生と合宿記

斉藤英子

(法三年)

今年の合宿は、私達三年生が主に計画して行ったせいか、特に考える処が多く思い出深い合宿でした。私は、女子全員が一つに

なる事についてこんなに深刻に考え

た事は、はじめてのような気が

がします。

合宿においては練習中大変興味深

い事が見られるのです。なぜならば

いつも練習熱心だった者も、それ程

でなかった者も合宿中は同じ時間、

同じ鞍数を乗せられます。だから同

じ期間中に大変上達する人、そうで

もない人、癖の直って行く人、出

て来る人、つらそうな顔を表に出

す人、そうでない人……。

普段の練習では見られない姿を発見するのです。生活にかける面

でも同様、新しい姿をふとした機会に見出す事も出来るのです。

団体生活において女の子の特徴といえば、全体の規律の為にわが



まゝをおさえる事が不得意な事、身体的について行けなくなると精神的にどんどん離れてしまつという事、そして「同学年同志かばいあいましょう」的な所がある事（良い意味にも、悪い意味にも）その為大変まとまりのつきにくい人種とされているわけですが、今回の合宿、乗馬クラブの方々がびつくりし、感心される程全員よく働き、よく乗り、よく走り、よくがまんしました。大浜海岸の大波の音にかきけられそうになりながら必死で発声練習をしていた下級生、ランニングの時つい列から落ちそうになりながら努力していた人の顔、疲れて、こんなにやせほそつた馬に乗るのはつらいと言つた人、キャンプファイアーをかこんでの一時私にとっては心に残る事ばかりです。同じ事を、ある者は涙の出る思いでし、ある者は余裕さえ持つてした事だつてあつたに違いありません。でも、みんな、合宿生活の間から私は合宿という事に対する一つの答が与えられた様に思つのです。毎年行われる合宿でその学年なりに、クラブ生活の何かを得られれば、本当につれしい事だと思ひます。

合宿の感想

上野 かなこ

（文、一年）

私は合宿というものを経験したことがなかつたので、苦しい面も多いたつとは思ひましたが、とても楽しみにしていました。

大浜乗馬クラブは、青山の馬場と比べるとずっと広く、伸長速歩、鎧あげ、障害、ブランケット、巖登りなどふだん練習したことがない、初めてのことばかりだったので、苦しかったことよりも楽しかった記憶の方が鮮明です。毎日一時間以上も馬に乗つたのにとても短く感じられました。午前中は発声練習、前傾姿勢、柔軟体操、マラソン等を行ない、それが終わると石拾い、草刈りなどをしましたが、特に発声練習は、合宿に行く前よりもずっと声ができるようになり、成果がみられたと思ひます。前傾姿勢においては、一分という時間の長さを思ひ知らされました。合宿では一年生のそれぞれが、いろいろな面で会得したことが多かつたと思ひます。六畳一間に十一人も一緒に生活したことも、同輩の新しい面を知ることができ、より親密さを増すことになつて、これらのクラブ生活の上で大きく影響することと思ひます。



＝ 訪 問 記 ＝

福原美里さんを尋ねて

青 木 京 子

(教育四年)

私達は、青山学院大学馬術部の初めての女子部員の一人であった福原美里さんを会社にお訪ねしました。そして、その当時の興味深いお写真やお話をきかせていただきました。大変お忙しいのでしたので、あまり邪魔してはと思つたのですが、たのしいお話について二時間も邪魔してしまいました。

女子馬術連盟のエピソード

平木さん、福原さん、梅本さんの三人は、一九五三年初めての女子部員として青山学院馬術部女子部員の伝統の第一ページをつづられた方達です。女子馬術連盟設立の中心となられたのは平木さんでした。男子の試合ばかりであった当時、平木さんは腕ためしの場を求められ奔走なさつたのです。そして、勇敢にも、初対面の東京大丸の社長であった田中正佐氏に連盟の会長となつていただきたいと申し出られたのです。田中氏は女子部員の熱意と勇気と行動力に敬服なさり、会長の役をひきつけて下さつたのです。そしてついに女子馬術連盟の設立の偉業がなされたの

でした。伝統をほこつていた学習院、慶応などからいさゝかの文句もあつたとの事・・・

当時、馬術部の馬は青峰、青姫の二頭、部員は二五、六名だつた為、練習は大変だつたそうです。

一九五四年十月二三日女子の初の対抗試合である第一回対学習院戦が行われました。

六名戦の障碍の試合、障碍の数六個、最高90cm、記念すべき試合のメンバーは、伊藤淑子(二年)、梅本(三)、平木(三)、

福原(三)、小野塚(一)、松居(一)、青山の馬一頭、学習院から六頭を出しました。

一年生の中には三鞍目托しての出場者もあつたとか・・・青山学院大が優勝しました。

一九五四年には第一回対慶応戦が、そしてついに一九五五年三月十三日には関東女子学生馬術大会の第一回が開かれたのです。その時の女子トーナメントは成蹊、慶応、法政、早大、青山、学習院、中央の参加で行われました。優勝は慶応で、青山学院は4の差で惜敗し二位となりました。

一九五五年六月二十六日関東女子学生代表選手選抜競技大会が行われました。丙種馬場(今の馬場程度)ではなかつたかと思わ



誌 上 馬 学

内 藤 喜 嗣

（昭三十三年卒）

れる」と中障碍の総合で平木さんが一位になりました。十月三十日には第一回関東北女子学生馬術大会が開かれました。当時の新聞にその記事が大変大きく取りあつかわれていたのが切りめきによつて残されていました。きつとめずらしかつたに違いありません。

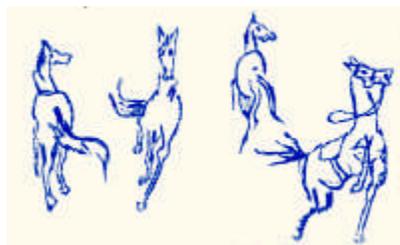
団体は青山が優勝、個人では、一位平木、二位福原、三位松居と青山勢の独占に終わり輝かしい足跡を残されたのでした。

以上女子の試合を通して、女子学生馬術の振興の跡をたどつてみていたゞいたのですが現在私達の目の前にここにこなさつていらつしやる福原さんは、本当に生々と新鮮で当時の御活躍を想像できるのでした。そして最後に、おつしやるには、「私は馬術を経験し、強い体力と精神修養とそして良い先輩と良い友人を得る事が出来ました。馬に乗るには、鋭い馬術感覚があればそれにこした事はないが、まず努力する事、研究する事が第一だと思います。本当に大切な事はその事でしょう」と。

女子学生馬術の振興に情熱をそゞがれた福原さん達があつたからこそ現在の事と思うと、その根深い伝統にはじない一ページ一ページを私達も又つづつて行かなければならないと感じました。

いななきの原稿を依頼され御引受けしたものの、何を題にすべきかと考えるだけで何日も費いやしてしまい、もう明日はメ切である。何分にも好きな馬から縁遠い毎日である時、またテレビの競馬ダイジエストや西部劇で凜凜しい馬の姿を見て胸を弾ませるだけである。学生時代の体談も以前に仲間や自分も投稿済みであるし、現在の部の状況も知らないで意見を挿む資格もないのである。

自分は幼い時より動物が好きで、色々の動物を飼育してきたがなんと云つても馬が一番好きだ。温順で人を待つて居る様なつるんだ黒い目はなんとなく自分の心が通じる様な気がしてならない馬術部に行つて乗る事よりも、馬に接する事を楽しみにしていた、こんな事で、以前馬について調べた事を現役の皆さんに何かの参考になればと思つてまとめてみた。



この馬と云う動物は哺乳類發生の新生代の第三紀の始新世（エオシンの）オロヒップス・メリオヒップスから漸新世（オリゴシンの）プロトヒップス・フツパリアルへ更に、中新世（ミオシンの）パレオテリウムと云う動物を経て鮮新世（プリオシンの）現在の馬の祖先であるエクスが生れた。エクスには支部からアジア地方に生息した頭が兎頭をなして目の位置が耳に接近し、が立つており背にはまん線が通っている(A)エクスフェルス（草原馬）とロシアのポルガからコーカサス山脈の高原地帯に住み、ヨーロッパに広く分布していた目の位置が鼻に接近して居り頭が直頭の(B)エクスグメリ（高原馬）とヨーロッパに広く散在していた絞頭をしており鼻染がとび出し、尻が福尻であつた（重種に多い型）(C)のエクスアペリー（森林馬）がいた、そして第四紀最新世を経て現代に至り(*)は欧州の東の方にあたる東邦種（又は温血種と云つ）に(B)、(C)は西邦種（冷血種）に進化していった。東邦種を代表する馬はアラビア産の馬から改良されたアラブ・サラブレッド・アングロアラブ等であり駈走馬である、そして西邦種を代表する馬はベルシュロン・ブラバンソン等で常歩馬である。紀元前二千年には既に馬の改良が行なわれていたが、これは戦争の為の戦車や荷物を運ぶ物で乗馬のためではなかつた、乗馬用のためには紀元六百六十年頃とされている、これも勿論戦争の為に行なわれている。クルベット・カプリオールなどの運動は馬上格闘の為に行なわれたものである。

しかし時代のたつにつれて火薬の發明から、十四世紀頃から速度を重んじる様になつた、そしてマホメットが宗教を奨励するために馬を使用し又彼が馬を奨励していつたので西洋に東欧馬が流れ込んでいつた。

アメ
リカ大陸は
コロンプス



の行つた時には馬がいなかつたとされている、しかし風土及び広大な土地と草馬から馬が非常に盛んになつた、勿論中南米も同じである、このように時代を経るにつれその用途により東欧種（馬格は小さいが軽快で敏感で粗食に耐へ強い）と西欧種（馬格が大きく強力で鈍重である）の支配により乗馬としての軽種、挽馬としての中間種、駄馬としての重種と改良が進められた。

ここで我々に関係の深い軽種 中間種の主な物に触れてみると軽種の代表としてアラブ種を上げられる。

アラブ種はアラビア原産の東邦馬の最も優れた純血種で体高は140cm〜146cmで小柄であるが理想的な体形をなし軽快で速力もあり持久力及び国土に対する馴化性が非常に強く遺傳的に確實性があるため種馬として多くの馬の改良に使われ近代乗馬の基礎をかためた種類である。

サラブレッド種 原産地はイギリスで純血種である。体高156cm〜170cmと馬格は優美である、この種はイギリその豊かな草馬

と国土においてアラブ種の線かえしの改良によって生れた競走用血種で非常に鋭敏で速力が早い、しかし風土に対する馴化性に弱く使用管理がむずかしく強度の使用に耐えにくい。

アングロアラブ種、原産地フランス純血種体高は155 cm ~ 165 cm でサラブレッドアラブを交配して改良した血種で両方の良い所をそなえている。

（アラブ原種）		（サラブレッド）	
A	+	P	S
	+	P	S
	+	P	S
62.5%	25%	25%	50%
37.5%	75%	75%	50%
中半血	a, a	a, a	a, a
a, a			

アラブ血腫25%以下のものは準サラブレッドと云う

中間種

アングロ・ノルマン種・原産地フランス、体高157 cm ~ 163 cm

フランスのノルマンディ地方の土産馬をサラブレッドで改良したもので、騎兵馬として非常に強い種類である。

ハンター種、原産地イギリス、体高155 cm ~ 165 cm イギリスの在

来馬をサラブレッドで改良した。耐久力と飛躍性に優れている狩 獵用馬である。

東プロシヤン種、原産東プロシヤ（ドイツ）体高155 cm ~ 165 cm ドイツ陸軍が騎兵として作った馬で、東プロシヤ土産馬とアラブ

とサラブとからできている（ P.S 75% AR 12.5% + 12.5% ）
 が大きく速度があり、鋭敏であり馬品があり、又、強く、粗食にたえ、乗馬として最高の傑作とされている。

以上が乗馬の主なもの、挽馬にはハックニー、トロッター、ニコス、ホルスタイン等、重種の駄馬には、ベルシユロン、フライソデ、ブラバンソン、シャクアート等と用途に応じ、改良されたのである。

さて日本に於ては古来（紀元前）から野馬（和種）を相当使用されてきたが、馬格が小さく、又、各地方ごとの生産にとどまり、改良はあまりなされていなかった、そしてナポレオン三世が江戸時代に外国馬を頭ばかり入れたが、改良が行なわれたのは、明治時代に入ってからで、特に明治三十五年に馬政改良の三年計画を立て、各国から色々の種類を輸入し、戦争方式の変哲と共に馬もそうとうに改良された、又北海道開発などの広い平地を開拓するためにフランスから馬格の大きいベルシユロン等を輸入して、戦時中は20万頭もいた、戦後は軍隊がなくなり又アメリカ軍により競走馬生産の停止命令等により中断されたが新たに農林省の力をかりて改良、生産方針を立てなおし、120万頭としたが年々食用量が大きくなり又、農耕馬は耕運材に、馬車馬はトラックにと置きかえられ、頭数は激減している。しかし、現在競馬の復活と隆盛で競走馬の生産は非常に益えている、このような訳で現役諸君は今後競走馬を使用せざるを得なくなると思うが、サラブは前

にも上げたように鋭敏であり強度の使用弱い上、管理が非常に難しい馬である上、東京オリンピック以来、競技レベルが向上している訳であるから、人馬一体の体力作りと鍛錬に励んでほしい、又馬は口がきけないのであるから、細心の注意をもって、健康管理を御願ひする次第です。

二部・高等部記

学友会馬術部の思い出

緑蹄会会長 秋 元 国 松

(昭三十二年率)

私が馬と又馬術部と関係を持つようになったのはおよそ十八年番前になります。私が大学に入りました頃は現在の学友会馬術部は、同好会で、学校よりの予算はありませんでした。入学した年に中島先輩が部にするのだといって部員を集めるのだとがんばっ

ておられました。その時の入部者で今も名簿に残っておりますのは、私と瀬島君です。その年に部への昇格が認められ馬糧代には程遠いすめの涙と言つよりは蟻の涙といった方が良い程の額が予算として与えられました。馬術部はオール青山の気風があり高校、短大、一、二部大学を含めて馬術部と呼んでおりました。

学友会馬術部は、日曜日しか練習が出来ない者、時間的制約のある者等が居りました為学校のグラウンドが使用出来ず、東京乗馬クラブ、清風会などで練習しました。清風会といえば、先年廃止になりその跡に私の勤務しております第一ホテルがポーリング場、スーパーマーケット、レストラン等の経営をしておりますのも何かの因縁かと思っております。

学校での練習は夏休みに体育会馬術部部員(当時としてはこのよつな呼び方ははなはだ不自然でしたが)に練習の指導をしてもらいましたが、お互の部のへだてとゆつものはなかつたように覚えております。各学部の部員もお互に知り合い交流もつまきいておりました。然しグラウンドが綱島に移転するにつれて、何かと疎遠になり勝ちとなりました。

グラウンドの関係で部と部との関係が薄れてゆくのは残念だと思えます。私もグラウンドに顔を出すことが少くなり、部員の皆様には申し訳けないと思っておりますが仲々思つようにゆきませぬ。

学友会馬術部はその後、横浜乗馬クラブ・神奈川乗馬クラブに移転し、たまたま先輩の一人が自馬を寄付してくれたのを契機に

自馬を持つようになり、体育会馬術部との仲はますます遠くなる感じをいだかせました。神奈川乗馬クラブが閉鎖された為に、いろいろと捜しまして現在の武蔵野にあります。さくら乗馬クラブへ移り段々と都心から触れてゆきつつあります。この次はどこに移るか考えますと大変頭が痛い思いです。

私としては、学校のグラウンドでのびのびと学生が練習している姿を見たいと願っております。色々と困難な事はあると思いますが、先輩の方々のお力添えを頂いてオール青山にふさわしい馬術部をつくりたいと考えております。



二部馬術部活動報告

主将 原 文 雄

我々が綱島のグラウンドを離れてかなりの年月がたっている。現在、小金井市にあるサクラ乗馬クラブの馬場を借りて練習しているが、ここに落着くまでかなりのところを点々としてきた。勿論

その時代は諸先輩方の頃であったが、今にもましていろいろな御苦労があったにちがいないと思う。又貸与馬による練習から自馬を持つて、それによる練習を行い始めたのも数年前からである。その時点において、いろいろの苦労をして自馬を持ったという事は大変うれしかったにちがいないし、自馬に対する愛馬心というものも新らしく生れたであろう。又二部馬術部を永遠に育てていきたいと思つたにちがいない。

現在、我々はその諸先輩方の意志を受継いで練習にはげんでい

る。現在では自馬一頭から三頭にまで増やし、部の組織及び内容も昔よりも飛躍したと思つている。しかしながら今だに自分達の馬場を持つていないという事は最高に悲しいと言つて残念でしょうがない。自分達の馬場でもおもしろい練習がしたい。これが我々の念願であるし、この事を頭に入れて毎日の練習にはげんでいる。昨年一部、二部馬術部の合体問題における事件があり一部馬術部の皆様に御迷惑をかけた事は、また記憶に新しい事でありませう。この様なことがおきたのも、自分達の馬場を持ちたいと言つて一心からでした。

先に書いた通り我々は現在小金井市にあるさくら乗馬クラブで練習をしておりますが、乗馬クラブに来る一般のビジターとの時間の関係、法政大学二部馬術部との時間の関係、あるいは飼糧の面、馬場の悪さ等、色々な事で不満が沢山あります。一方では乗

馬クラブでは学生を気嫌らしいするむきもある様です。乗馬ブームのおり貸馬場で一般のピジターと練習する事はむずかしくなっている事は確かです。そのたびに、自分達の馬場をもちたいという願いは強まる一方です。

しかし、その中で我々はいろいろな行事をやり多数の試合に出てきました。

我々は学生馬術連盟には加盟しておりませんが、一般の試合にはできるだけ数多くひろって出場しております。そして試合に臨むたびに良い馬にのって出場したいと思っています。現在のような馬では、試合に出場してもとうてい勝めはありません。現状において馬を入れ替えたいという事も馬場の問題と同様上位にランクされております。

過去をふりかえってみると、いろいろな事が思い出されます。最近においては、十二月十四日に二部馬術部主催のダンス・パーティを行いました。これには一部馬術部の安田先輩、飯野君等が見られ、事故なく盛大に行なわれました。十二月七日に納会を行いました。以前、一部の納会だったから、総会だったかは不明瞭ですが、この時、かなり現役同士が、〇を無視したような感じで自分等なりに楽しんでるように見えました。それを我々の納会にもとり入れたらと思ひ、今回の納会はギターを持ち出し、バイキングタイプで行い、かなりリラックスしたムードのうちに終わりました。十一月二十九、三十日にはアバロン乗馬大会、三

十日の新馬馬場において青鷹で第三位入賞を果しました。十月に日米親善大会、淵野辺で行なわれ、一年生を出場させましたが、まだまだ乗りきれず失権。七月、夏季合宿。六月、都民大会。これも青鷹で失権。四月、新入生観迎会。今年は意外にも新入部員が少なかつた。

我々クラブの致命的な事といえは、最大な事項に部員数が少ないと言つことである。現在の部員数が約〇〇名、少なくともこの倍の教はほしいところである。この部員が少ないという事で部員個々の士気の向上をばばみ、精神的なもろさを、つくり上げてしまつてはないだろうか。

今年馬場の問題、馬の出し入れ、部員数の増加など我々二部馬術部にとつて非常にいそがしい。反面飛躍の年となるだろう。練習の場が学校にないという点において学校側ともいろいろな問題があります。

高等部記

主将 白 井 豊

高等部馬術部

同好会からクラブに昇格して二年目をむかえています。何度か部と同好会の間をいたり来たりしてたようですが、今では人数も増え、クラブ というものに落ちついたようです。

練習の場が学校にないという点において学校側ともいろいろな問題があります。

又、高校だけでは馬は維持していけないということにおいて大学の馬術部というものとも大変密接な隣係があります。その関係において今まではあるいは今でもそうかもしれませんが、ただ単に相互の手伝いという面においてしか表われていなかったように感じます。同じ綱島の馬場で練習しているというだけで、他に何もなかったようにも感じます。そのようなことで大学のクラブに対する不安も生れてくるのだと思います。

しかし、今年の文化祭は、馬術部で参加した為、大学の馬術部に大変御協力をいただいて、成功を収める事ができせした。クラブというもので試合が大きな要素をしめるように、馬術部でも試合が一つの大きな目標となりました。今年も年に三回の大きな試合の他に男女合わせて小さな試合が何度か行なわれました。

十月に行なわれた女子の障害、馬場の試合では優勝し、男子の障害では二位。

又、四月に行なわれた自馬戦では団体三位を獲得しました。夏のインターハイでは、惜しくも三回戦で敗戦を味わいましたがそれが、今より、より大きな馬術部をつくる一つのステップとなるように、部員一同協力していきたいと思っています。

現役幹部紹介

緑鞍会係 木村 敏夫

(経営三年)

私は緑鞍会係りですので、誌上を借りまして、現役の紹介を致したいと思います。といつても全員は無理ですので、とりあえず、男子新幹部を一言づつ紹介致したいと思います。

まずは、新主将 伊納保夫君 名古屋の出で、中学のころから馬に乗っているだけあって技術は、かなりのものがあります。又賭事には、いつさい手を出しませんし、くだらない事も、たしなむ程度の真面目な男です。馬術総勢（名）（内女子（名））を、女子の強い圧力に屈することなく、いかにまとめていくか、乞う御期待というところです。

次は、女房役副将の曾我正晴 浜っ子で、お米は絶対に口にしないという変り種 よく見ると「佐良直美」に似ていますが、女の子に人気があつて、合宿の折など、一人だけパンとバターが付き、他の男子部長の羨望の的となっております。

さて、第三の男といえは、曾我君に対して一方の雄、ケンサンこと主務の飯野和男君、栃木は万町の生れで、いまをときめく高倉健に、似ていることから、誰いうとなくケンサン。女子部員か

ら、おにぎりのさし入れをもらったり、尊敬と嘲笑をこめて、ケンサンなどと呼ばれると、グジグジ眉毛をピタピクと動かし、やにさがっているの図は、OBの方々には一見の価値があると思います。

次に会計の六平潔君、父親が銀行員で、血統的にも一流です。重いかばんをいつも持ち歩き、他の部員から「お前は、女には縁のない男だから、どんな恰好をしても無理だよ。」などと馬鹿にされても、唇をかみしめ、じつとがまんして聞いている忍耐力、いつもマージャンに負けて、顔面蒼白になりながらも、がんばる根性、馬術部の苦しい財政を、ささえるには、最適な人物であると信じます。

第五弾は、マージャン好き、酒好き、清潔嫌いという協会幹事の山本隆夫君。彼も高校から馬に親しんでおり、母親を遠く名古屋に残しての東京住いです。関西遠征の際、名古屋のホームでの母親との久々の対面の場面、母親の心配そうで、うれしそうな目山本君のてれくさそつを顔、とても感動的でした。

さて最後の私、緑鞍会係りの木村敬男（どうぞおわすれなく）ですが、二年から入部した異色の存在です。一言で私を表現する言葉を捜しますと、「眉目秀麗」といつのか適当ではないかと思われます。

つまらない事を、くどくどと書いてしまいましたが、この程度のことです。現役を理解することは不可能だと思います。また誤解が生

れても大変ですので、品の方々には長非、暇を見つけて、馬場へお立寄りになることをお願い致します。

また、会費徴収などで、現役がおじゃまする事が、あると思いますが、すこしは話し相手になってやるつという努力を惜しまれぬようお願い申し上げます。

座談会

一、二年生による

出席者 佐倉・上野・小林（一年）

渡辺・原野・牧・渡辺（し）（二年）

司会 安田（四年）

- ・ 入部動機は？
- ・ 小林、前から馬が好きだったからです。
- ・ 渡辺、何もありません
- ・ 兄貴がいたからだろう？
- ・ 渡辺、それも逢うんです。（一同？）
- ・ 牧、・・・（かなり考えて）



ムダに大学生活を送りたくなかったの。

それじゃ他のクラブだって良かったんたろう？

・ 牧・それがどうまちがったのか・・・。(笑)

・ じゃあ、一年生の場合はどうだい？

・ 上野・他に入っているクラブがなかったの。

・ 佐倉・馬術が好きで、うまくなりたかったことです。

・ 入部動機はこのへんにして、次に上級生に希望することは？

・ 小林・急に、いろいろ決めないでほしい。

「(注)今日の座談会も急に決まったし、男子の更衣室では

これまた急に幹部会が開かれ、着替えることも出来ずで、

彼なりに頭にきていたもよう。」

ぼくだって、いろいろいそがしいんです。

・ 一年の女の子は？

・ 佐倉・すべて満足です(笑) (と、ウツトリ気味)

・ 渡辺・ほくも、すべて満足です。

・ これは、ちょっとウソっぽいなア。

・ 渡辺(し)・たくさんありますけど、

いざというときわかりま

せん。

・ 次に、今年の合宿の思い出について

小林から、

・ 小林・お料理当番だったので、彼

女から、お料理メモを、もらって作りました

一同「ホー」

ちょっとお酒を飲みすぎたみたいですね。夜は、なにし

る逃げまわった (笑)

(女子にはわからず、男子はゲラゲラ、よっぽど楽しか

ったらしい)

・ 女子の方は？

・ 一年三人・上級生と歌をつたって楽しかったと思いまアす

(笑)

・ 渡辺 (し)・去年に比べて雑談が出来夜かつたみたいでした。

去年一緒に遅くまで、かしゃべりしていた三年生が、

早く寝なさい と言ったりで、大分変わったので、その

せいもあって、(誰と誰がこつでといった)新情報が入

いらなくて、とつても残念でした。(とホントに残念そ

う)

・ 佐倉練習中の落馬写真が誰だかでもめちゃって・・・。ピー

バーのドンクのパンのさし入れがおいしかった。

(注)上級生には、どうもまわらなかつたようでした。

・ 次に、君達のOB、OGについての考えはどうだい？

・ 原野・知ってるOBの方だと身近に感じるんですけど、やっぱり

知らない人は、ちょっと・・・

・じゃ、それはどうしたらいいと思う？

・原野「学生が、集まる場を待ったとしても、来る人は決ってるんじゃないですか？」

・渡辺「（し）もっとO・Bと密接につながりたいと思っただけで、O・Bの方も、もっと積極的にした方がいいと思います。試合などは、見に行らっしゃれると思うので。」

・でも、現役の方でも積極的に行かなくちゃいけないね、O・Bの人の交流を望んでいない現役なんているはずないんだし、その具体的方法はないかな

・佐倉「具体的に、といっても良くわからないけど、O・Bの方で卒業しても、馬を続ける人が少ないですね。もっと馬を続けてほしいと思います。そうすれば、馬を通じて、自然に、つながりが持てるはずだと思うんですが。」

・そつだね、それはあるだろうなア、もっとO・Bの方が馬に乗って活躍してくれるといいかも知れないね。でもいろいろ忙しくなってるんだろつな。

・上野「女の方が、O・Bの会に出ていらっしやらないのは、なぜでしょうと思っつ。」

・小林「来る人と来ない人が、もうはつきりしちゃってる感じ。」

・ぼくなら、しつこく来ちゃいますヨ（笑）

・あと、他に何でもいいから言っつことない？ 今後の抱負とか、

原野はっ。

・原野「今まで通りですよ。」

・おまえは考えない男だなア（笑）

・渡辺「かげの人間になりたい。キザだなア（笑）」

・渡辺「（し）新馬がみんな良くなっつてほしいですね。」

・佐倉「上野、試合に勝っつてほしいし、勝ちたいと思っつ。新馬も良くなっつてほしいと思っついます。」

・あと他に希望はっ？

・渡辺「追い出し会いつにしようかな？（笑）」

・渡辺「（し）YMの食堂で！（笑）」

・一同「会費持ちより（笑）」

「司会者も笑っつてどまかす」

・小林「男子の部員をもっつと多くしたいな。」

心細くて…（笑）

・上野「私達が四年になっつても、最後まで、練習に出てきたいと思っついます。」

・渡辺「四年生、そんなに遠慮しないでほしい。練習に来て、馬に乗っつて下ろし。」

・どうもあががとっつー！

於 網島グランド内馬場 馬房の通路で。

試 合 記 録

関西遠征

（昭和四十四年二月二十五日～三月一日）

対甲南大学戦（二月二十五日）

障害（川嶋(4)、六平(3)）

-4

-7

我校 1×甲南

馬場 芦川(4) 安田(4)

92.0
85.5

我校 1×甲南

対京都産業大学戦（二月二十六日）

障害（環(4) 曾我(3) 飯野(3)）

-144.5

-190.25

我校 1×京産

馬場（六平(3) 山本(3)）

115.4
114.6

我校 1×京産

対大阪府立大学戦（二月二十八日）

障害（芦川(4) 安田(4) 川嶋(4) 飯野(4) 曾我(3)）

大阪府大 - 36.
- 457
- 我校

対関西大学戦（二月二十八日）

障害（芦川(4) 安田(4) 環(4) 川嶋(4) 山本(3)）

-293

-316

我校 - 1×関大

対名古屋学院戦（三月一日）

障害（川嶋(4) 安田(4) 曾我(3) 山本(3) 六平(3) 飯野(3)）

-220

-460.75

我校 - 1×名古屋

東都学生自馬競技大会（三月十九日・二十日）

・新人障害

山本(3) 青留 五位

・中障害

芦川(4) 青留 違反失権

安田(4) 青豪 -12 十七位

・複合馬術

馬場

障碍

芦川(4) 青留 -10 五位

川嶋(4) 青駿 -89.785.9 失権

関東学生馬術争覇戦 (四月二十四日・二十五・二十六日)

第一回戦

・対明治大学戦(芦川(4)、里中(4)、安田(4)、伊納(3))

292.5 -34

我校 | ×明治

・対農工大学戦(芦川、里中、安田、伊納)

-13.5 -342.5

我校 | ×農工

第二回戦

・対専修大学戦(芦川、安田、里中、伊納)

専修 | ×我校

・対立教大学戦(山本、曾我、飯野、大平)

-4 -15.5

我校 | ×立教

(よつて二回戦で敗退する)

関東学生馬術選手権 (四月二十七日)

男子(第一次予選) よつて四名とも第一次予選にて

敗退する

芦川 | 19点

安田 | 15

伊納 | 18

里中 | 12

女子 (第一次予選)

青木(4) | 17.5

管内(4) | 22.5 (予選通過)

相川(3) | 26 ()

渡辺し(2) | 23 ()

関東学生新人馬術大会 (五月十六日)

障害

飯野(3) 青留 -24.75

曾我(3) 柏青 失権

六平(3) 青豪 失権

原野(3) 青駈 失権

東京都乗馬大会 (六月一日)

学生障害

芦川(4) 青留 -4

安田(4) 青豪 -6

里申(4) 柏青 失権

東日本大会 (六月七日)

障害

芦川 青留 -8

安田 青豪 失権

選抜障害

芦川 青留 -5

東北学院戦 (六月十日)

障害団体戦(伊納、山本、曾我 木村)

東北 1×我校
-319.0
-404.5

関東大学馬術選手権 (六月二十一日)

障害

芦川 青留

安田 青豪

里中 柏青 失権

-36.25-12

関東学生馬術選手権

女子 (決勝)

渡辺 (し) 一位

管内 (4)

相川 (3)

115.1 107.1 140.6

よって渡辺(し)は女子決勝で関東一位となり、関東選手となる。

関東学生自馬對抗競技大会 (九月六日・七日・八日)

調教 耐久 余力

芦川 青留 -79 -50 キケン

安田 青豪 -94 -82 キケン

山本 青駿 -82 失権

伊納 柏青 -88 失権

アパロン大会 (十一月二五・三〇日)

新馬障害

飯野 青朋 失権

伊納 青冠 0 9位

中障害(A)

伊納 青留 -4 19位

中障害(B)

原野(2) 柏青 失権

小障害

三宅(3) 柏青 失権

渡辺(し) 青留 -3 三位

B馬場(婦人)

平井(2) 青駿 70点 13位

B馬場(一般)

斉藤(比) 青留 75点 16位

渡辺(友)(2) 青駛 77点 13位

関東北女子学生馬術大会

障害団体戦(青木(4) 芳野(4) 渡辺(し)(2))

-465

我校 | × 帯広畜産

-383

我校 | × 東北

-219

我校 | × 宇都宮

(よつて団体健勝す)

個人戦

相川(3) | 3位

斉藤(3)

学習院女子定期戦 (昭和四五年二月十二日)

・レギュラー戦(国際総合馬場)

田村(3) 相川(3) 三宅(3) 渡辺(2)

-230.7

我校 | × 学習院

・障害

芳野(3) 斉藤(3) 相川(3) 渡辺(2)

224.7

我校 | -24.5

| × 学習院 -47.75

・新人戦(B馬場)

平井(2) 薄井(2) 佐倉(1) 上野(1)

269.5

我校 | × 学習院

268.7



青留号

サラ、セン、鹿毛
現馬匹中最も優秀である。
すべて学生に上って調教された。



青駛号

中半、ヒン、鹿毛
39年6月より現在に到る
水沢上り購入する
すべての部員に愛される馬であ

馬匹紹介



青虎号

アラ系、セン、鹿毛。
43年5月より現在に到る。
反動が高く練習者泣かせである。



青貴号

サラ、セン、黒鹿毛
43年5月より現在に到る。
我部の秘蔵馬であり、容姿、運動とも
にすばらしい。



青笛号

ア、ア、セン、鹿毛
43年12月より現在に到る。
東京競馬場より寄贈される。
現在新馬調教中である。



柏青号

アラ系、セン、鹿毛
柏乗馬クラブより購入する。
現馬匹中最も体高の低い馬である。



青朋号

サラ、セン、鹿毛
44年3月より現在に到る。
白井分場より寄贈される。
非常に素直な馬である。



青冠号

アラ系、セン、栗毛
44年5月より現在に到る。
アパロン大会新馬戦こて満点で
ゴールする。
今年のホープである。

編集後記

いよいよ春らしく、関東近郊の桜の便りも聞けるようになりました。「光陰矢の如し」と申しまして、本当に月日のたつのは早いもので私は学生生活最後の春を迎えることになってしまいました。思い出多い馬術部とも、いよいよ「サヨウナラ」を言わなければなりません。

ところで約八年間も休刊してありました『いななき』を再発刊しようという意見が我々四年生と部長先生の間で討議されたのは昨年の十一月中旬でした。それから三ヶ月も要して、どうにかこうにか編集出来ました。最近とみに議論の集中しておりますOBと現役との距離を少しでも縮める事が出来るようにという事を主目的に置き編集致しました。

ですから発刊後からその目的を遂行する為により重要であると思いません。

私はこれからが青山学院馬術部は本当に強くなれるクラブであろうと信じます。我々は過去四年間というもの優勝という駅に通じる線路を敷いて来ました。人数が多過ぎて列車に乗れない人間もいました。又脱線してしまつた時もあり、違う駅に向つて進んでしまつた事もありました。しかし現在は列車に乗れない人間もなく、頑強なレールも敷かれ、列車にも馬力が貯えられました。

さあ行くぞ！ 青学馬術部！

最後に投稿されましたOB・OG・諸氏、それから部長先生、監督さん、そして現役諸君本当にありがとうございました。

（里中記）

いななきー第八号

昭和四十五年七月十五日 印刷
昭和四十五年七月十五日 発行

編集委員

里中郁男
安田義生
青木京子

発行委員

芦川誠次
環川誠次
川嶋透
菅内道子
桐山令子

印刷 文華タイプ

八二二（四九六〇）